横須賀水交会

そして、これから！

横須賀水交会会長　土井克彦

少々気の早い話ですが、現時点で今年の横須賀水交会（以下本会）の諸活動を振り返るとともに、今後の本会の活動の方向性を探ってみたいと思います。

前号（第33号）において、本年度の活動の指針として引き続き「会勢の拡大」を標榜し、その柱を一般有志会員を対象とします『隠れ海上自衛隊ファンの発掘努力』と『海曹出身の方々の入会促進』に置きました。

そしてその具体化策として、前者では新入会員の定着化も含め『既存事業の再活性化（魅力化）を図る』こと、後者では『部隊隊員に本会の存在感を育む』ことと『海曹出身者への直接的働き掛けを行う』ことを目指しました。以下その実施結果について私なりの検証を施してみます。

先ずは既存事業の再活性化ですが、本会が主幹事を勤め7月下旬に実施しました「横須賀夏期防衛講座」では講師に前防衛大臣である森本 敏氏を迎え、県立保健福祉大学の講堂を満席にする５００名になんなんとする聴衆を集め、我が国の安全保障問題に関わる啓蒙活動に大きな足跡を残すことができました。計画当初これだけの大物の招聘が実現できるか否か少なからぬ危惧を覚えておりましたが、担当である柴田・永田両幹事の粘り強く且つしたたかな交渉術で幾多の障害を乗り越え、夏期防衛講座としては近年稀にみる成功を収めることができました。

発行　平成25年11月13日
編集　横須賀水交会事務局

次いで9月初旬に実施しました「部隊研修」では、本会初の試みとして海自と米海軍航空基地を対象とします厚木基地を研修先に選定し、会員の視野の拡大を目指しました。地域柄、艦艇部隊に馴染みの深い本会会員に執って航空部隊が興味をひく研修対象となるか否か多少の不安も有りましたが、例年と変わらぬ参加者数を得るとともに、担当の安齊幹事の名采配と米海軍を含めた部隊側の親身な対応により、極めて有意義な部隊研修となりました。特筆すべきは参加者の約1／3の方々がこ1～2年の内に入会された新入会員であったことです。

当日は今夏特有の天候不順に見舞われ、厚木進出の交通便さへままならぬ状況の中、遠くは千葉や埼玉から駆け付けて頂いた新入会員も居られました。その中の一人の会員に問い掛けました。「この悪天候の中良くお出で頂きました。やはり最新鋭の国産哨戒機P-1の魅力に牽かれてですか？」その方の答え「P-1もさることながら、私も横須賀水交会員ですから！」これには思わず目頭の熱くなるのを覚えました。

10月劈頭計画外事項として「馬門山海軍墓地修復竣工式典」を計画・実施しました。本修復工事は水交会本部が施工主となり実施されたもの

横須賀水交会主要行事予定

来年3月までの主要行事予定は、次のとおりです。なお、最新の情報は横須賀水交会ホームページ（http://y-suikoukai.daa.jp/）で御確認下さい。

1　幹事会

（1）期日　12月11日（水）
（2）幹事会
　場所　厚生センター２F
　時間　14：00～16：45
（3）懇親会
　場所　よこすか平安閣
　時間　18：00～20：00

2　合同賀詞交歓会

（1）期日　26年1月18日（土）
（2）場所　横須賀商工会議所
（3）会費　4千円（女性2千円）

3　靖国神社月例参拝

期日　26年2月20日（木）

であり、本会は水交会横須賀支部としてその支援に当たる立場で対処しました。従って、その竣工式典も建前上は本部主催という形ではありましたが、実効上は本会がハンドリングし計画・実施されたものです。

この様な背景から計画当初は施工主から施工業者への感謝状贈呈式程度の小規模なものを想定しておりましたが、当該修復工事が地元新聞で報道される等の諸情勢を受け思わぬ大掛かりな式典に変貌し、小泉衆議院議員、横須賀市長、市議会議長、商工会議所会頭始め横須賀地方総監や米海軍基地司令官まで参列するものとなりました。このため担当の佐々木幹事は諸機関・団体との調整は言わずもがな、神主（神事）から音楽隊までに至る多方面の調整を余儀なくされ、結果的にＡ４版10数枚にも及ぶ実施要領を作成配布する仕儀となりました。しかしながら天は彼の努力に報うこと無く、当日早朝から現場は台風20号の迷走に依る驟雨に見舞われ、急遽式典を中止し近傍の行政センターで水交会関係者のみによる感謝状贈呈式に変更する事態となりました。

しかしこの一連の騒動は思わぬ副産物を本会へ齎しました。それはこの地域に於ける『横須賀水交会のステータス（存在感）』が如何に高まって来ているかを再認識させるもので有りました。本会会長名で発行した式典への案内状は期日も迫っていたことから、大部分は代理出席の返事が返って来るものと踏んでおりましたが、豈図らんや諸機関、諸団体の長自らが競って参加意向を表明されたのであります。それは佐々木幹事の作成した実施要領の重さがこれまでの横須賀水交会の諸活動の重さとなって大きく反映されたものと推察されます。

今次イベントを通じ、本会は従前にも増して地域との連携を密にし、地域にしっかりと根付く活動を推進して行くことの重要性を甚しく痛感した次第です。

次に部隊隊員への本会の存在感を示す案件です。８月下旬本会初の試みとして、横須賀教育隊における練習員修業式及び曹候補生修業式で、それぞれの課程の優等生に対し横須賀水交会からの激励賞を授与致しました。本件は部隊隊員に横須賀水交会の存在を印象付ける事業の一環として取り組んだもので、武居総監並びに水交会本部の深いご理解の下に実現化に至ったものです。とは言え、これまで当該式典で外部団体からの表彰事例は無かったことから部隊側共々手探り状態での企画推進で、その調整に当たった清水幹事の労苦は並大抵なものでは無かったと推察しております。

それだけに賞状を渡す役目の小職としましても強い緊張感に襲われ、猛暑の中で冷や汗一斗の感を味わい、式典終了後総監、教育隊司令或いは参列した部隊指揮官等から『あれは良かった！』との好評化を受け、ホット胸を撫で下ろしたものです。その中で教育隊先任伍長の猪俣曹長から「土井会長、今回の表彰は練習員の大いなる励みになりました！」との言葉は何よりのもので、今次企画の成功を噛み締めることができました。又本部からの情報に依りますと、来年度から全国規模でこの種表彰を本部計画として実施するとの話も有り、今次案件を通じ、本会の『(自称)水交会リーディング支部』としての役割も果たし得たのではないかと自負しております。

次いで海曹出身者への直接的な働き掛けですが、現在担当の清水幹事の方で本部とも連携して『海曹講習での水交会紹介』或いは『退官予定者に対する勧誘活動の具体化』等について関係機関と鋭意調整中であります。本件は歴史的な背景や障害を有する案件でも有り、少々時間が掛っても周辺事業の効果等も取り込みながら焦らず実効の上がる対処策を案出する積りで取り組んでおります。

以上、本年度の本会の主要な活動状況を概観して参りました。少々我田引水のきらいは有りますものの、総じて年度当初目論見ました『会務運営の目標を唯一会勢拡大に置き、全ての事業をそれに沿う方向で展開する。』との目標は達成しつつあるものと判断しております。因みに平成23年3月31日時点での本会会員数６８０名であったものが、現在時点（25.10.21）では７９２名迄伸長して来ております。この分で行きますと年度当初掲げました『会員数一千名をめざして！』のスローガンは決して夢・幻では無いものと思えて参りました。このことは我々の目指す

会勢拡大基盤の育成が誤りでは無いことを意味しており、引き続きその努力を推進して行く所存であります。しかし、この「会勢拡大」は決して横須賀水交会の最終ゴールでは有りません！　それは本来横須賀水交会が果すべき役割の体制作り（手段）に過ぎません！

　我々はこれに安住すること無く、更なる高みを目指して新たな活動展開を図る必要があります。以下その私案を提起してみます。

【そして　これから！】

　先般発刊された「水交誌」（平成25年度　清秋号）の巻頭言で、本部の藤田理事長が「海上自衛隊支援について」と題した一文を載せられております。そこでは厳しい内外情勢に呼応して過酷なアクチャル・フォースとしての対応を果たしている海上自衛隊に対し、水交会として実効性の有る支援の有り方を縷々述べられており、その中の巻末に記されている次の一文が強く私の目を牽き付けました。

〔将来の事態急変時、現在の日本社会の状況から予測される要処置事項等で処理態勢が未整備のものがあります。例えば、有事に多発するであろう各地方での留守家族への支援対策であります。現実的で長続きする対処要領を腹案として策定しておくことは、今できる水交会の支援事項となるのではないでしょうか。（本文抜粋）〕

と言いますのも、本件は従前から武居総監との懇談の場で幾度か話題となっているテーマであり、本会としてもいずれ真剣に取り組まなければならない課題として認識していたものであったからです。武居総監がこの種態勢の必要性を意識されたのは大湊総監時代の3.11事案が契機であったようで、総監部組織と海自ＯＢ主体の水交会が連携してこれに当たる絵姿を描いているように受け取りました。とは言え、現在の本会の体制を勘案しますと軽々に応諾するには少々荷が重過ぎるのではとの想いと留守家族が我々に何を期待しているのか皆目見えない状況下では対処の切っ掛けも掴めないことから、先送りを決め込んで来たのが実情です。しかし留守家族が困っているとの現実が有るならば、８００名にも及ぶこの組織が手を拱いていることは最早許されないのではとの想いにも駆られています。思い付きで恐縮ですが、先ずは留守家族との交流の場として「バーベキュウ大会」等を企画してみてはどうでしょう。無論本会のみに留まらず「曹友会」、「上級海曹会」等との共催も選択肢の一つで、現役・ＯＢが相和して留守家族を励ます場が作為できればとも考えます。先般吉田横須賀市長と懇談した際、隊員も留守家族もりっぱな横須賀市民、その方達を励ます催しを企画したら行政側も場所や機材等の提供に応じてくれますか？と問うた処、大いに乗り気ではありました。本件はこれ迄本会として取り組んだことの無い領域の課題ですが、その能否も含め検討の遡上に挙げて行きたいものです。但し以下の藤田理事長の言を追記しておきます。

〔但し出過ぎないことは大切です。節度を持ってこのような努力を重ねれば、現役とＯＢの間の心の交流も出来てくると思います。一つになって事に当たる、理想的な姿が見えて来るのではないでしょうか。（本文抜粋）〕

　次いで地域活動の一環として「馬門山海軍墓地保存会（仮称）の設立」を提起します。既述しました通り、関係者の努力に依り馬門山海軍墓地の修復が成りましたが、現在の態勢のままですと又いつの日か墓地の荒廃を招くこととなりましょう。そこで本会がイニシアティブを執って当該墓地の保存会の設立を目指しては如何でしょうか。当然のことながらこれまで墓前祭に携わって来た各団体・機関更には行政側（横須賀市）にもより深く関わって貰える（予算計上）恒久性のある保存会とすることが肝要です。

　本件についても吉田市長や板橋市議会議長にそれと無く当たった処、両者とも好感触でありました。そこで本会としては既に設立実績の有る佐世保、呉、舞鶴等の情報を集め、横須賀の実情に即した在り方を導出し、関係機関へ働き掛ける方向で取り組みたいと考えております。

　以上、今後の活動の方向性を上記二つの事例を牽いて示しましたが、いずれもこれから常務幹事会へ提起しようとするもので、全く私案の域を出ないものであることをお断りしておきます。要は会勢拡大基盤の成

った本会が、今後新たな活動展開を図ることの必要性を申し述べたかった訳です。従って、これらの事例が次の執行部の活動を縛ることに成るとすれば、それは本意ではありません。それはそれで新たに目指す方向性を掲げ活動頂ければ本望です。

いずれにしても横須賀水交会は新たな段階（時代）に入って来たことは間違い無いものと考えております。新しい酒は新しい革袋に入れるのが常で、組織の新陳代謝は図らなければなりません。そのことが今後の横須賀水交会の発展を担保する要因となることを願って筆を置きます。

【投稿】
村井嘉浩宮城県知事の講演および海外の子供達

会員　佐野　恭子

６月４日、三笠講堂で村井知事の講演を拝聴した。驚いたのは知事の溢れるエネルギーと、その明るさであった。知事は災害、復興、そして将来の創造について話された。津波の想像を絶する悲惨さ、実に宮城県が震災と津波被害の60％を蒙ったこと、けれども前よりずっと活気溢れる街を創ろうという意欲と実地の青写真を示された。津波の映像を見た。知事に残された連絡手段はＰＨＳ電話だけだった。村井知事こそ「有事の名将」と思う。彼だけは「指揮命令系統」とは何か、防大で学んだ。支援に駆けつけた君塚陸将とは「同じ言葉を持つ」「どういう指示をだすとどう動くかを熟知している」間柄であった。私は君塚陸将の講演を同期の野井元海将補と日米協会で伺った。そこで感じたのは陸自は単に「軍」としてではなく心のこもった、暖かな人間達の動きをした。

それはソマリア沖海賊対処第一次隊指揮官であった五島1佐の講話を聞いた時にも思った。日本の海自だけは集合時刻に遅れた船も待ってやり、纏めて守った。泣きながら無線で救助を求めたシンガポール船のために全速力で海賊の間に割って入った。五島隊がジュロンに入港した時、シンガポールは国を挙げて謝意を表した。

今回の震災で被災した方々が作った「自衛隊さん有難う」の横断幕から、現場の気持ちが伝わってくる。村井知事の並々ならぬ馬力、エネルギーは防大で身につけた防大出の方々が自覚していない大きな力だ。

知事の講演が終わった時、お隣の福岡3佐に「なぜ今日は制服の方が大勢、横監から来ているのですか。」「私らは真水を入れたバージを海路、宮城まで引っ張っていったのです。」「はー。」「その時は海将が一人ひとりに行くかどうか聞きに来ました。」「任務拒否できるのですよね。」彼は胸を張って「一人も拒否したものはいませんでした。全員被爆すると思いました。タングステンを艦に貼り付けましたけど被爆は覚悟しました。」その時私は鳥肌だって感動した。この「損得を考えず自分自身さえも省みずに使命を全うする」事は全く金にならず、分かり易い栄誉に結びつかない。私はその姿勢を心から尊敬する。

海外の子供達・・・イスタンブールでこの6月子供達を見ていた。子供を持つというのは生半な事ではない。船賃250円でボスポラスから青い海を横切って近くの島に渡った。子供が大勢いた。黒のスカーフで汗だくの親を尻目に、歓声を上げて駆け回り、動き回る子供達。生き生きした子供の目。道路に面した食堂で子沢山の一家が上機嫌で豆と卵とパンの食卓を囲んでいる。路面電車に7歳くらいの坊やがアコーディオンを弾いて乞食をしに来た。青年、おじさんが普通に子供の目を見て何か話し、お金を渡していた。バスがひっきりなしに走りホコリまみれのエネルギーに満ちていた。

スイスで7月チューリヒ動物園に行った。動物達が自然に暮らしているのを遠くから見る。ゾウは体に砂を掛け続け、見ている人間砂だらけ。カワウソは獺祭の言葉通り肉片を置いて遊んでから食べた。レッサーパンダの太いしっぽと両手が目先の枝から垂れている。人間様は両親汗だく、日焼けの祖父母よれよれ・・2人乗りの乳母車、おしゃまな小学生と腕白小僧はアイスクリームを持っ

て駆け回り、汗みずくの両親・祖父母は力を尽くしていた。トラム（路面電車）とバスが、動脈のように動く。大きな乳母車が、しょっちゅう混んだ電車に入ってくる。誰もが何とかスペースを作る。老人に対しても、私が大荷物を持っていても同じようにしてくれる。白い両肩丸出しのワンピースに、赤いハイヒールの臨月の人がトラムで立っていた。席を替わろうと手を伸ばした若い女性に断わり、停留所を軽々と降りて行った。チューリヒ湖で泳いだ。夏休みとて子供たちが歓声と共に草の上を駆け回っている。ここで感じたのは宗教も有るだろう、文字通り「女性」という性を大切にしている。小さな少女も豊かな乙女も、臨月も老女も、気がねせずにビキニの手足をのびのび堂々と陽にさらしている。女体は、決して卑しいのではなく、大切な、大切な存在。湖は23度。海自が海を相手にする困難さをつい思う。父親が大勢いた。7月の夕陽を浴びたポプラの大樹は豊かな生命そのもののように輝いていた。

　ホテルに帰って8時、窓下の路地で子供の歓声が響いた。10人近い子供達が裸足でかくれんぼしている。わあわあ、きゃあー・・父親3人が一緒になって遊んでいる。9時丁度に引き取っていった。子供に掛ける実に膨大なエネルギーと、幼子は社会が守るのだという法的、文化的な強い姿勢がなかったら、子供は決して増えないだろう。

「横須賀市政報告：軍港資料館」

市議会議員・幹事　木下　憲司

第3回定例会（9月）において、横須賀市議会は（仮称）軍港資料館検討委員会（委員長：木下憲司）を設置しました。

　慶応元年（１８６５年）横須賀製鉄所（後の横須賀造船所）の建設、そして明治17年（１８８４年）横須賀鎮守府の開設以来、近代横須賀は軍港とともに発展してきました。当時、横須賀軍港は全国的に第1軍港と定められていました。横須賀の歴史は、海軍―軍港を抜きにしては語れません。つまり、近代横須賀が軍港とともに歩んだ歴史は、横須賀のアイデンティティそのものといえます。これを後世に伝えることは、現代に生きる我々の使命ともいえます。また、月日の経過とともに、往時の資料は散逸する恐れがあり、軍港資料館として歴史を保存する必要があります。大東亜戦争の終結そして帝国海軍の解体以来今日まで、多くの人々が軍港（又は海軍）資料館を横須賀に建設すべしとの考えを主張してきましたが、いずれも頓挫して実現には至っていません。このような状況に鑑み、市議会として検討委員会を設置し、この軍港資料館構想を具現化する努力を始めました。

　横須賀製鉄所を偲ぶ建造物としてティボディエ邸があります。有名なヴェルニーの片腕として、製鉄所建設に携わったティボディエ副首長の、当時の官舎です。同邸は明治3年（１８７０年）頃に建設された歴史的建造物で、西洋の建築技術が我が国へ導入された当時の様式を示す貴重なものです。同邸は平成16年（２００４年）に解体されましたが、その部材は横須賀市が保管しています。軍港資料館建設構想の先駆けとして、このティボディエ邸を再建する気運が盛り上がっています。昨年の市議会第4回定例会（12月）に、市民有志からティボディエ邸再建に関する請願があり、全会一致で採択したところです。

　再来年の平成27年（２０１５年）は製鉄所開設、すなわち軍港開設１５０周年の節目の年となります。（仮称）軍港資料館検討委員会は、H26年度末までの予定で、検討を進めますが、適宜の時機に検討状況を開示して、多くの市民の方々の意見も頂いて、構想をまとめたいと思っています。この委員会の検討結果が、軍港資料館実現の礎になることを願っています。

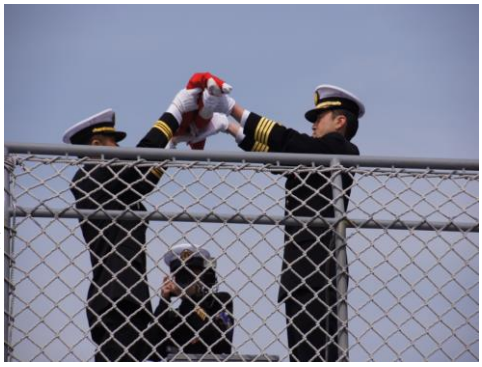
【参加行事等紹介】

１　さわゆき自衛艦旗返納行事

　４月１日（月）横須賀港吉倉岸壁において、護衛艦「さわゆき」（艦長渡邊雄一１佐）の自衛艦旗返納行事がまさに年度初めに、武居横須賀地方総監により執り行われました。

　松下自衛艦隊司令官をはじめ各部

隊指揮官等部隊関係者、横須賀市市民部長等官公庁関係者参加の中、横須賀水交会会員をはじめとして各防衛団体等も多数参加し盛大な式典となりました。特に「さわゆき」に縁のある方々は三々五々昔話を語り合うと共に、除籍を迎えた年月に感慨深げの様子でした。



行事は、横須賀音楽隊の国家吹奏のもと、自衛艦旗降下に始まり、艦長から総監に対し自衛艦旗返納、総監訓示の後、横須賀音楽隊の軍艦行進曲にあわせ乗員の退艦と厳粛かつ整斉と実施されました。

武居横須賀地方総監の訓示では、同艦の業績を詳らかにするとともに、その業績は歴代艦長以下乗組員一同が不撓不屈の精神を持ち、一丸となって任務達成に邁進した賜物であるとして、海上自衛隊に対する貢献に謝意を表すとともに最後の乗組員の労をねぎらいました。

さて、「さわゆき」の業績について訓示から引用しますと、「はつゆき」型護衛艦の４番艦として、昭和59年3月15日石川島播磨重工業東京工場において就役しました。横須賀、大湊そして再び横須賀と転籍もあり、今日までの約29年間護衛艦隊及び横須賀地方隊の中核として活躍しました。その間護衛艦隊及び横須賀地方隊の年度優秀艦として数回の表彰、また、幾度にも及ぶ米国派遣訓練、遠洋練習航海、海上自衛隊演習等において、その実力を遺憾なく発揮しました。更に、東日本大震災に際しては、発災後約1時間で出港し、以後約３ヶ月にわたって災害派遣活動に従事しました。その活動は、総航程７５万８，１０２マイル、地球約35周分に相当し、総航海時数は６万３，４０３時間に及びました。

ここに、「さわゆき」の輝かしい業績を称え、歴代艦長はじめ乗組員のご尽力に深甚なる感謝と敬意を捧げます。

（廣江幹事　記）

２　潜水艦「ずいりゅう」横須賀初度入港歓迎行事

４月２日（火）潜水艦「ずいりゅう」（艦長　渡邉忍２佐）が横須賀港に初度入港した。

「ずいりゅう」は「そうりゅう」型潜水艦の５番艦として三菱重工神戸造船所で建造され、本年３月６日に就役し、同日第２潜水隊群第４潜水隊に編入された最新鋭艦である。

当日はあいにくの雨であったが、横須賀地方総監、自衛艦隊司令官、潜水艦隊司令官等各級指揮官、隊員、来賓、各協力団体及び家族等の大勢の出迎えを受け、横須賀音楽隊が歓迎演奏をする中、母港である横須賀港Ｙ２岸壁に予定どおり入港した。

我が横須賀水交会も本多副会長以下多数の会員が初度入港を歓迎した。

入港後、歓迎行事が行われ、艦長の自衛艦隊司令官への入港報告に引き続き、来賓を代表して吉田横須賀市長の歓迎挨拶、艦長、先任伍長及び乗員代表への花束の贈呈があり、渡邉艦長のお礼の挨拶で入港歓迎行事は終了した。

「ずいりゅう」は横須賀に配備された最初のＡＩＰ（Air Independent Propulsion：大気に依存しない推進機関）を装備した潜水艦であり、大きく水上に出たＸ舵の動きや、艦番号５０５は新しい潜水艦の配備を印象づけるものであった。

（上田幹事　記）

３　練習艦隊横須賀入港、歓迎

５月９日（木）、練習艦隊（司令官北川文之海将補）が、近海練習航海の最終寄港地である横須賀に入港しました。

本年度の練習艦隊は練習艦「かしま」（艦長　大野敏弘１等海佐）、「しらゆき」（艦長　川内健治２等海佐）及び護衛艦「いそゆき」（艦長　青木操２等海佐）の３隻で編成されていますが、当日は、横須賀音楽隊が歓迎の曲を奏でる中、「かしま」及び「し

らゆき」の２隻（第63期一般幹部候補生課程修了者１７６名を含む約５５０名が乗艦）が吉倉岸壁に接岸しました。

岸壁では武居横須賀地方総監はじめ各級指揮官等多くの隊員、吉田市長をはじめとした多くの来賓、各支援団体が出迎えました。

入港歓迎行事は、市長の歓迎挨拶、花束贈呈、司令官の挨拶等短い時間ではありましたが、心のこもった歓迎行事が行われました。

横須賀水交会も土井会長をはじめ多数の会員が自衛艦旗・水交会旗を掲げ、横須賀入港を歓迎するとともに乗員の激励を行いました。

同日夕刻、同市内において横須賀市、横須賀防衛協会、横須賀商工会議所、横須賀地方総監部共催の遠洋練習航海部隊壮行会が行われ部隊からも各級指揮官等が多数参加しました。横須賀水交会からも土井会長他多数の会員が参加しました。

壮行会は、主催者代表の吉田横須賀市長の練習艦隊・実習幹部に対する温かい激励から始まり、司令官及び実習幹部代表に対する花束贈呈、北川司令官のお礼の挨拶及び横須賀出身の松永理志実習幹部の挨拶、市長から訪問地であるフランスのブレスト市（横須賀と姉妹都市）に対する書簡の委託と続き、乾杯は山本横須賀市議会副議長の発声により高らかに行われました。

和やかな雰囲気の中、多くの支援者との歓談を通じて実習幹部は自分たちに対する期待の大きさを感じ、それに応えようとする意気込みが感じられました。

中締めは木村商工会議所会頭の音頭による万歳三唱及びその答礼として大野かしま艦長の万歳三唱が行われた後、小山満之助防衛協会会長の結びの言葉で締めくくられました。参会者一同名残尽きない中、実習幹部の前途を祝して万雷の拍手をもって見送りました。

壮行会終了後、場所を移して司令官、各艦長、先任伍長等を招待して横須賀水交会主催の歓迎夕食会が行われました。ここでも多数の会員が参加して、裃を脱いだ和やかな雰囲気の中での懇談で近海練習航海の労をねぎらいました。

練習艦隊の目的は「初級幹部に対し外洋航海を通じて慣海性をかん養し、幹部自衛官として必要な資質の育成に資する」とともに「諸外国を訪問することにより、派遣員の国際感覚のかん養に資するとともに友好親善の増進に寄与する」とされています。実習幹部諸官には訓練のみならず、諸外国との友好親善を通じて国際感覚を身につけ、心身共にたくましい船乗りとなられることを祈念しております。

（宮﨑幹事　記）

４　馬門山海軍墓地墓前祭参列

５月11日（土）、第58回目を迎えた馬門山海軍墓地墓前祭は、雨天のため大津行政センターにおいて粛々と執り行われました。

当日は、ご遺族関係者を始め、吉田雄人横須賀市長、山口道夫横須賀市議会議長、牧島功神奈川県議会議

員、木下憲司横須賀市議会議員等、自衛隊から井上成美防衛大学校副校長、武居智久横須賀地方総監、堂下哲郎自衛艦隊司令部幕僚長、徳丸伸一掃海隊群司令、山村浩護衛艦隊司令部幕僚長、寺山勝幸横須賀教育隊司令、落修司横須賀警備隊司令等、及び在日米海軍司令部からティモシー・ファーラー副司令官兼参謀長、並びに主催５団体（大津観光協会（主幹事）、大津地区社会福祉協議会、大津地区連合町内会、横須賀水交会、隊友会横須賀支部）関係者並びに一般参列者等、計約２８０名が参列しました。横須賀水交会からは土井克彦会長以下約３０余名が参加して、祖国のために散華された英霊に対して哀悼の意を表しました。

墓前祭は、参列者による「一同拝礼」、「国歌斉唱」に続き、増田茂大津観光協会会長及び横須賀市長による「追悼のことば」、海自儀仗隊による「拝礼」、参列者による「献花」、最後に参列者総員が「黙とう」を捧げ、終了しました。特に、海自儀仗隊等による「拝礼」は節度と威厳に溢れたものであり、本墓前祭に欠くことのできない儀式の一つとなっています。また、今回初めて湘南学院高等学校の生徒が参加して、受付や献花等の支援を行いました。

なお、墓前祭を取り仕切る主幹事は共催５団体が輪番で努めることとなっており、今回は大津観光協会が担当しました。横須賀水交会は共催団体の一つとして受付・誘導等の支援を行い、円滑な墓前祭の進行に勤めました。

終わりに、墓前祭を執り行うに際し、儀仗隊の派出等において、海自横須賀地方隊から多大な支援を得ていること及び本墓前祭に先立ち４月20日（土）に横須賀上級海曹会の隊員・家族等１０８名が墓地の事前清掃を行ったことに対して、主催各団体から深甚なる感謝の意が表されました。

馬門山海軍墓地は、明治15年に海軍省が戦死、若しくは殉職した海軍軍人の埋葬地として開設したものですが、軍艦「河内」、「筑波」等の殉職者、上海事変戦死者等、海軍軍人の英霊１５９２柱が殉職者之碑・個人墓等に祀られています。ただ個人墓の古いものは設置されてから約１３０年が経過し、傷みの激しい墓石、傾いている若しくは倒れている墓石が散見されるため、公益財団法人水交会の事業（横須賀水交会が実務を担当）として本年３月26日から修復工事（修復対象墓石約２３５基）を開始しました。既に一部の墓石は修復を終えていますが、工期は約６か月間であり、９月末完了を目途としています。

（佐々木幹事　記）

▼15面＝「修復工事終了」

５「海軍の碑」記念行事

５月27日（月）１２００からヴェルニー公園（ＪＲ横須賀駅前）内に建立されている「海軍の碑」の前において、記念行事を実施しました。

「海軍の碑」は、近代海軍創設から海軍成長の歴史とともに発展した横須賀市のシンボルとして平成７年11月17日に国の海軍関係者及び有志の皆様からの浄財により建立されたものです。

本記念行事は海軍記念日の５月27日に、平成13年までは横須賀海友会が、横須賀海友会と横須賀水交会が合同した平成14年以降は横須賀水交会が執り行っています。当日は晴天の中、横須賀水交会会員

有志が碑周辺の清掃を行った後、会員及び海軍の先輩等40余名の参加者を得て、整斉かつ厳粛と進行しました。

ラッパ「君が代」の伴奏による国旗及び軍艦旗の掲揚に始まり、海軍戦没者の英霊に対する1分間の黙とう、土井克彦横須賀水交会会長の挨拶、引き続いて、「海軍の碑」建立委員長であった常廣栄一元横須賀地方総監（第19代横須賀地方総監　海軍兵学校71期）から「先の大戦における日米ＡＳＷの戦果評価の違い」と題し、具体的な数値を用いて、実際の撃沈数と相手国発表の撃沈数との相違に関する詳細な分析等、大変貴重な講話を頂きました。

なお、常廣元横総監からは今回の講話を持って最後とし、後進に道を譲る旨の発表がありました。

その後、鎮魂の譜（「同期の桜」「巡検ラッパ」「海ゆかば」の３曲）を傾聴し、国旗及び軍艦旗の降下をもって終えました。短時間ではありましたが、海軍の業績を偲ぶと共に、海軍の英霊の追悼と永遠の平和希求に相応しい記念行事となりました。

（佐々木幹事　記）

6　平成25年度定期総会

5月31日(金)横須賀水交会の平成25年度定期総会、講演会及び懇親会が、よこすか平安閣において盛大に開催されました。

総会は道家幹事の司会により、物故者に黙祷をささげた後、会則の規定により土井会長を議長として、３つの議案について審議が行われ、いずれも賛成多数で了承されました。

その概要は次のとおりです。①24年度の事業及び決算報告については、92名の新会員があり、会員数は23年度末と比較し、70名増の７８３名であること、また、各事業とも計画どおり順調に実施されました。②新役員の選任については、新任、変更あわせて10名の幹事が選任され、引き続き土井会長の下で一丸となって運営していく体制が整いました。③25年度事業計画及び予算については、本部業務計画に基づく6つの活動方針ごとに事業計画を策定し、ほぼ例年どおりの事業及び予算となりました。

次に会員の方で平成24年度及び平成25度に叙勲受章された方々の紹介があり、一同拍手をもって祝福させていただきました。

最後に、新旧役員・新入会員の紹介が行われ、成功裏に総会を終了しました。

休憩の後、「海上自衛隊の現状」と題して、横須賀地方総監武居海将による講演が行われました。

内容は、「海上自衛隊のトピック」、「平成25年度横須賀地方隊年間行事予定」、「平成25年度横須賀地方隊業務実施方針」及び「東シナ海の現状と海上自衛隊の課題」の４項目でした。

最初の項目である「海上自衛隊のトピック」としては「海上自衛隊の日制定について」他、計５つの話題について述べられましたが、特に「海上自衛隊の日」については、海上自衛隊が組織された歴史・変遷を述べられ、海上警備隊が創設された「4月26日」が「海上自衛隊の日」として制定された経緯について詳細に説明されました。

また、最後の項目である「東シナ海の現状と海上自衛隊の課題」については、現在の東シナ海における事案が長期化するであろうこと、その長期化に適切に対応しなければならないこと及び日米同盟の強化に資する努力が必要なこと等について述べられました。

会員一同、この講演を通じて、改めて海上自衛隊を取り巻く現状と、それに伴う任務の重要性について再認識できた貴重な時間でした。

講演終了後、会場を移し、吉田横須賀市長、県議・市議、防衛関係諸団体代表及び講演に引続き参加された武居横須賀地方総監や松下自衛艦隊司令官等防衛省・自衛隊の部隊指揮官・先任伍長など、多数の来賓の臨席を得て、懇親会が行われました。

懇親会は土井会長のユーモアあふれる挨拶に続いて、来賓を代表して吉田市長から祝辞を頂きましたが、会長挨拶の内容を引用した得意即妙な市長の祝辞に会場はおおいに沸きました。　また、松下自衛艦隊司令官からはインド洋をはじめ３方面で活動している各部隊の紹介があり、会員一同、日本を遠く離れて活動している隊員達の健闘にしばしの思いを馳せることとなりました。

引き続き来賓紹介、祝電披露へと進み、武居横須賀地方総監の音頭で高らかに乾杯し、懇談に入りました。途中、遅れて駆けつけてきた小泉衆議院議員の挨拶をはさみ、会場のあちこちに再会と交流の輪が広がりましたが、横地隊先任伍長高橋曹長の中締めの乾杯をもって、名残惜しくも散会しました。　（宮﨑幹事　記）

７　第26回ゴルフコンペ

６月３日(月)、第26回横須賀水交会主催ゴルフコンペを千葉房総半島のエンゼルカントリークラブにて開催しました。

当日は、時より晴れ間の広がる曇りベース、炎天下でもなく微風、最高気温22度と比較的天候に恵まれたゴルフ日和のコンディションでした。

参加者は土井克彦会長以下66名、17組と前回より20名も多い参加数で、陸自出身者１名、民間からの男性４名、女性２名、ＪＡＮＡＦＡ個人賛助会員３名等の参加も頂き、華やかさと賑やかさで楽しいプレイをすることができました。

競技は従来どおり新ペリア方式で実施しました。ただし、同じ人が入賞しないように過去３回のコンペで１、２、３位に入賞した方は、新ペリア方式で出てきたハンディキャップからそれぞれ30、20、10％を減点することにしています。この減点は３回コンペに参加しないと消えません。今回は、柳井誠也氏が、グロス97、ハンディキャップ26.4、ネット70.6で優勝、２位には今回初出場の大津雅紀氏（90、19.2、70.8）が、そして３位はこれまた初出場、前海幕長の杉本正彦氏（98、26.4、71.6）がそれぞれ受賞という成績でした。

今回優勝の柳井氏は初優勝であり、見事に副賞のキャディバックを獲得し大喜びでした。また、大津氏も本来の実力を遺憾なく発揮され準優勝、副賞のボストンバックを獲得されました。ベストグロス賞には、ジュニアの部（65歳未満）では斉藤進氏がグロス83で、シニアの部（65歳以上）では過去４回優勝の近藤義美氏がグ

ロス71で前回に引き続き受賞、加えてエイジシュートも前回から連続となる偉業を達成されました。

優勝されました柳井氏から「幸運に感謝の1日」と題し次のメッセージを後日頂きました。

「過去3番目に早い梅雨入りですが、雨も風も強い日差しも無く、涼しい絶好のコンディションに恵まれ、加えて前会長の長崎顧問、坂東先輩、安齊さんという、すばらしいパートナーに恵まれ、肩の力を抜き、自然体でプレイをさせていただきました。また、途中皆様の貴重なお話を頂き、楽しい1日でした。しかし、発表の成績表を見てビックリ。こんなことも有るのか。なんとハンディが26.4もついてネット70.6で『優勝』。新ペリアの隠しホールにしっかり当たり、66人の中で1番の幸運を引き当てた結果でした。新ペリア万歳。皆さん、申し訳ありませんが、「ごっつぁん」です。今回の結果は、靖国神社等の月例参拝に対する英霊からのご褒美であったものと得心し、6月20日にはしっかりとお礼をして参ります。ありがとうございました。」

水交会主催コンペは会員の親睦を目的としたゴルフ大会ですが、水交会会員のみならず、陸海空自衛隊のOBや友人・知人・家族まで幅を広げて参加者を募り、水交会の活動に理解を深めていただければ幸いと思っています。またこの中から水交会に入会していただければこのコンペの目的を十分に果たすことができるものと考えています。たくさんの方に声をかけて参加者を更に増やしていただくようご協力よろしくお願いします。

（迫幹事　記）

8　横須賀夏期防衛講座

7月27日（土）、横須賀地区の防衛協力諸団体共催による恒例の平成25年度横須賀夏期防衛講座講演会及び納涼懇親会が神奈川県立保健福祉大学において開催されました。

当日はうだるような猛暑日であったにもかかわらず、多数の自衛官を含む来賓及び各種防衛関連団体会員並びに約50名の一般公募者を含む約500名の聴講者が詰めかけほぼ満員の盛況となりました。我が国を取り巻く内外情勢が厳しさを増す中で、夏期防衛講座が横須賀の夏のイベントとして地域に定着し、自衛隊や防衛問題に対する市民の関心と理解も高まりつつあるとの感を強くしました。

講話は小山横須賀防衛協会会長による開会挨拶及び来賓紹介に引き続き、主幹事である土井横須賀水交会会長による講師紹介で始まりました。

講師の森本敏前防衛大臣は、昭和16年生まれで、防衛大学理工学部を9期生として卒業後、航空自衛隊に入隊しました。昭和52年に外務省アメリカ局安全保障課に出向、昭和54年に外務省入省後は、在米日本国大使館一等書記官、情報調査局安全保障政策室長など一貫して安全保障の実務を担当しました。外務省退官後は、慶応大学、中央大学、政策研究大学院大学、聖心女子大学等で教鞭を執り、平成12年から拓殖大学国際学部教授、同大学海外事情研究所所長等の要職を歴任し、現在も拓殖大学教授として活躍中です。平成21年8月初代防衛大臣補佐官、平成24年6月第11代防衛大臣に就任、オスプレーの沖縄配備推進等日米共同の強化に尽力する等大いに手腕を発揮されたのは記憶に新しいところです。

「最近の東アジア情勢と日本の安全保障課題」と題されて始まった講話では、尖閣諸島を守る我が国の動きを継続することの重要性が分かり易く解説されるとともに、北朝鮮の新指導体制の権力掌握過程における注目点や日韓間に横たわるいわゆる歴史認識の考え方と我が国の近現代

史の事実に基づき適切に国際社会において我が国の国益を堂々と主張し得る人材を育成する必要性が強調されました。

我が国を取り巻く内外情勢が厳しさを増す中で、夏期防衛講座が横須賀の夏のイベントとして地域に定着し、自衛隊や防衛問題に対する市民の関心と理解も高まりつつあるとの感を強くしました。

講演後は、納涼懇親会が盛大に行われ、講師を囲む輪が幾重にもできて熱心な意見交換が続き、テーブルごとの防衛談義も大いに花が咲き、平成25年度横須賀夏期防衛講座は所期の目的を達成し予定通り終了しました。

（安齊幹事　記）

9　護衛艦「いずも」進水式

８月６日（火）、ＪＭＵ（ジャパンマリンユナイテッド（株））横浜事業所磯子工場において、平成22年度計画護衛艦の命名、進水式が執り行われました。

この護衛艦は、「しらね」型護衛艦の代替として建造が計画され、基準排水量１９，５００トン、長さ２４８ｍ、幅38ｍ、深さ２３．５ｍで、ヘリコプター５機が同時に発着艦でき、９機を同時に運用、約14機を搭載できる能力があります。また洋上司令部機能、洋上給油機能を有するほか、手術室や35名分の病床など洋上医療能力も強化されています。さらに、乗組員約４７０名とは別に約４５０名が長期滞在できる設備もあります。「ひゅうが」型護衛艦を排水量で約５，５００トン、長さで約50ｍ上回り、就役すれば、海上自衛隊最大の艦艇になります。

式典は、麻生副総理、江渡防衛副大臣、河野海上幕僚長及び鎌田装備施設本部長をはじめ防衛省関係者並びに建造所関係者等多数の参列者を得て、武居横須賀地方総監の執行により、厳粛かつ整斉と進められました。

横須賀音楽隊の演奏に合わせた国家斉唱の後、防衛省を代表して江渡防衛副大臣が「本艦を「いずも」と命名する。」と防衛大臣の自衛艦命名書を読み上げました。引き続く進水式では、麻生副総理と江渡防衛副大臣が支綱を切断、シャンパンが船体に砕けると同時に、くす玉が割られ、色とりどりの風船が舞い上がり、紙テープ・紙吹雪が舞い散る中、艦番号１８３「いずも」は、静かに沖側へ曳き出されました。

式典終了後の祝賀会では、建造会社代表、江渡防衛副大臣及び石破元防衛大臣からそれぞれ挨拶がありました。江渡防衛副大臣は、我が国の海上防衛の中核をなす護衛艦が進水したことへの祝意と中長期的な視野に立った艦船建造の重要性について述べられ、また石破元防衛大臣は、「いずも」進水への祝意の後、艦名が同じ山陰地方で地元の「いなば」であればよいと思った旨を吐露し会場を笑いの渦に包み込みました。また出雲大社の縁結びに因み「いずも」が多くの国々とのご縁を結ぶ役割を担っていくことへの期待並びに護衛艦「はるな」以降「いずも」に至るＤＤＨ建造の変遷と関係者の苦労などについて触れられました。

「いずも」は、これから、平成27年春の就役に向け、吉野ぎ装員長をはじめとするぎ装員と防衛省及び建造所関係者により、「知恵と技術と思いを込めた」ぎ装が進められることになります。横須賀水交会からも会員多数が参列し、「いずも」の進水を祝し、ぎ装の無事な完成を祈るとともに、力強く輝かしい勇姿に自衛艦旗がへんぽんと翻る「いずも」就

役の姿を思い描きつつ、多くの参列者とともに式場をあとにしました。

（一瀬幹事　記）

10　横須賀教育隊成績優秀者に対し水交会から初表彰

横須賀水交会では、８月23日に実施された横須賀教育隊第３５８期練習員課程及び第55期練習員（女性）課程の修業式並びに８月30日に実施された第６期一般海曹候補生課程の修業式において、成績優秀者４名（男性２名、女性２名）に対し、初めて、表彰状及び記念品を土井会長から贈呈しました。

横須賀水交会は、今年度の重点活動の一つとして、現役隊員の激励施策及び海曹出身ＯＢ会員のさらなる入会による会勢拡充を掲げ、横須賀地方総監部や横須賀上曹会等と意見交換を実施してきました。その結果の一つとして、教育隊における表彰が検討され、今回の表彰が実現したものであり、今回は、以下の方々が表彰されました。

第358期練習員課程

浅海篤輝　二士

第55期練習員（女性）課程

太田和帆　二士

第６期一般海曹候補生課程

宮崎勝磨二士

齋藤悦乃　二士

なお、今回の横須賀水交会の活動は、来年度以降、水交会全体の事業として他教育隊でも実施する方向で水交会事務局により検討準備されているところです。

今回、表彰された皆様が、部隊において更なる研鑽を積まれ、海の防人として大きく成長されることを横須賀水交会一同祈念しております。

（清水幹事　記）

11　平成25年度部隊研修

９月５日(木)午後、厚木航空基地の部隊研修を行いました。

当日は激しい降雨が続いたため、相鉄本線は、落雷のために早朝から正午過ぎまで電車の運転が見合されました。そのため、時間通りに参加者が到着できるか危ぶまれましたが、多くの会員は、船乗りの習慣でもある５分前の精神を遺憾なく発揮され、バスやタクシーを乗り継ぎ早々と集合場所の相模大塚駅に現れました。その結果、約70名の参加者は基地への移動を予定より早く完了することができました。

研修では、まず第４航空群司令部首席幕僚村上１佐による派遣海賊対処行動航空隊の表彰や厚木基地所在部隊の説明がありました。辛坊氏を救助したことで一躍注目された海自飛行艇ＵＳ-２や飛行訓練中の米空母艦載航空機など日米の飛行場地区も間近に見ることができました。

次に、丸山渉外専門官から米国以外の港に配備されている唯一の原子力空母ジョージワシントンを支援することが主たる任務である米海軍厚木航空施設（ＮＡＦ）について現状説明がありました。

米海軍の指揮系統、所在部隊、任務等の他、東日本大震災に際して行われた日米共同によるトモダチ作戦の状況についての説明を受けました。数千名に及ぶ空母乗組員の平均年齢はわずか21歳ということです。数多くの若い兵士が米海軍の前方展開戦略の第一線を支えていることが紹介され関心を集めていました。また、英語講師の派遣による地域の小中学生との交流や清掃活動・盆踊りなど地域の各種行事に積極的に参加するなどボランティア活動を通じた米海軍による地元対策の周到さには改めて感服させられました。

ここで、参加者は２個班に分かれ大型バスとマイクロバス２台に分乗し北回りと南回りで車窓から滑走路周辺を見学しつつ米海軍のヘリコプター部隊と海上自衛隊の第51航空隊の新型哨戒機Ｐ-１を交互に研修しました。

ＨＳＭ-51ウォーローズは、今年の３月７日にＨＳＬ-15から改称されました。ＳＨ-60ＢシーホークからＳＨ-60Ｒロメオに機種変更中で、今年中に変更が完了するようです。新しいロメオの操縦席は４つの大型表示

装置が装備されていて、左右同じ画面が見られることもあり、主操縦員席と副操縦員席は区別されておらず、操縦員は好きな方に座るとのことでした。対潜哨戒や捜索・救助などの任務に応じ、装備を変更して出撃するということです。乗員は操縦員２名と搭乗員１名の計３名で異なる任務も一人でこなし省人化に努めているとのことでした。

隊司令のルー海軍中佐以下副長と若手操縦員２名による実体験を交えた説明に質問が相次ぎ、操縦席に座らせていただくなど得難い体験に感動しました。参加者総員と米海軍説明者がヘリコプターの前で記念撮影し部隊を後にしました。

第51航空隊は、「海上自衛隊で使用する航空機及び装備される機器の性能調査、評価、用法研究等を行うとともに、航空部隊に対し技能向上のための訓練指導やこれらの業務に従事できるテストパイロット等の養成教育」を実施する部隊です。51空副長藤澤１佐による概要説明に引き続き現在試験中の新型哨戒機Ｐ－１を研修しました。ボンベイドア及びエンジンカウルを開いた状態で機体と試験状況をうかがいました。機体はボーイング７５７型と同じ大きさですが、驚くことにターボファンエンジンの静粛性に優れ、現在運用されている哨戒機Ｐ－３Ｃのエンジン音よりも低いのだそうです。純国産開発の新型哨戒機Ｐ－１は素晴らしい機体で試験も順調に進み、運用が開始されれば海上防衛を担う主役となりそうです。緊張が高まる我が国周辺海域における警戒監視やジブチにおける海賊対処活動に継続的に部隊を派遣しつつ最新鋭の新型哨戒機の一日も早い運用開始に向け日夜試験に励まれておられる航空部隊の士気と術科練度の高さに深い感銘を受けるとともに、米海軍と肩を並べて日米共同の実をあげベストパートナーとして全幅的に信頼を得ている海上自衛隊の姿に日米安全保障体制の重要性と信頼性を強く感じることができました。

研修の最後は、コンベンションセンターで米海軍や海上自衛隊の研修でお世話になった方、湘南水交会の主要役員をお招きしての懇親会となりました。まず、業務多忙の折快く多大な研修支援をいただいたことに改めて感謝する土井会長のあいさつがありました。

日米共同使用という厚木航空基地の特性と米海軍との協力状況や地元との友好関係に触れられた森田第４航空群司令のごあいさつにうなずく会員が多く見られました。

米海軍厚木航空施設司令官ワイエマン海軍大佐の乾杯で大いに杯を上げ日米の友情や地元住民とのエピソードに研修での質問事項の確認など大いに盛り上がりました。米海軍の方々を含め現役隊員を激励し、あわせて湘南水交会の方々との交流を深める機会を得られたことは横須賀水交会会員の大きな喜びと誇りになりました。

改めまして厚木研修の実現にお骨折りをいただきました第４航空群司令部管理幕僚白井登紀子３佐、渉外幕僚阿部和嗣１尉、米海軍厚木航空施設丸山澄枝渉外専門官に感謝申し上げます。

横須賀水交会は、横須賀所在の海上自衛隊のみならず計画的な東京近郊の自衛隊基地の研修により現役隊員を激励するとともに、防衛や安全保障の良き理解者として会員の視野を広め新規会員の獲得と定着に着実な手ごたえを感じながらも、なお一層の努力継続の必要性を強く感じて活動しております。（安齊幹事　記）

12　馬門山海軍墓地修復工事終了

公益財団法人水交会（藤田理事長）主催により、馬門山海軍墓地修復工事完工に伴う感謝状贈呈等が平成25年10月2日（水）午前10時から大津行政センター2階学習室において、高嶋元横須賀地方総監、小沢横須賀商工会議所名誉会頭、土井横須賀水交会会長ほか会員等約30余名が出席する中、粛々と執り行なわれました。

当初は馬門山海軍墓地（旧横須賀海軍墓地）において小泉復興大臣政務官、吉田横須賀市長、武居横須賀地方総監、クラフト在日米海軍司令官等の出席を得て、竣工式を執り行う予定でしたが、台風22号の動きが予報より遅くなり、荒天が見積もられたため、急きょ実施場所と式次第の一部を変更して実施することとなりました。

式は「国歌斉唱」に続き、「藤田理事長挨拶」、修復工事を請け負った相川石材店（横須賀市）から藤田理事長へ修復工事前後に個人墓を撮影した貴重な資料となる「工事写真帳贈呈」、藤田理事長から相川石材店へ「感謝状贈呈」、小泉復興大臣政務官、及び吉田横須賀市長から届いた「祝電披露」、終わりに「修復工事の概要説明」をもって終了しました。

引き続く「昼食会」においては工事中の苦労話、今後の墓地管理の在り方等に関して話が弾みました。

なお、当修復工事は水交会の事業（修復費用の約２００万円は財団法人「防衛施設周辺整備協会（東京都港区）」が支出）として実施されましたが、当墓地が横須賀市に所在することから地理的状況等を考慮し、横須賀水交会が工事の進捗状況を逐次確認するとともに竣工式の細部調整、当日の受付・案内等の支援業務を行いました。

当墓地は、明治15年（１８８２年）に海軍省が戦死、若しくは殉職した海軍軍人の埋葬地として開設（上段・中段・下段墓地で形成）され、以後、横須賀鎮守府が終戦まで管理運営を担当していました。昭和24年（１９４９年）、横須賀市が横須賀地方復員局から維持管理を引き継ぐとともに一般墓地を造成し、現在に至っています。当墓地には軍艦「河内」等の殉職者、上海事変戦死者等、海軍軍人の英霊１５９２柱が殉職者之碑等（９基）・個人墓（２７９基）等に祀られています。

個人墓の古いものは設置されてから既に約１３０年が経過し、荒れ放題で傷みの激しい墓石、傾いている若しくは倒れている墓石が散見されたため、本年3月26日（火）から修復工事（修復対象墓石：兵２３５基）を開始し、9月20日（金）に修復工事を終了しました。（佐々木幹事記）

【トピックス】

1　25年度第1回幹事会

9月14日（土）ホテル・ハーバー横須賀において、平成25年度第1回幹事会・同懇親会を行いました。

幹事会は、会長、顧問以下約50名が参加しました。内容は、今年度上半期に実施された活動、定期総会、馬門山海軍基地墓前祭、海軍の碑記念行事、靖国神社等月例参拝、ゴルフコンペ、夏期防衛講座・納涼懇親会、厚木基地部隊研修等に関して、担当幹事から成果、所見について説明があり、参会者から今後の活動も視野に活発かつ熱を帯びた意見が交換されました。

懇親会では、会長挨拶の後、来賓代表として登壇した武居横須賀地方総監が横須賀教育隊修業式での横須賀水交会表彰授与が他団体も羨む程、際立っていたこと、また海上自衛隊水泳大会で横須賀地方隊が11年ぶりに優勝し、しかも半数近い種目で1位を獲得するという完勝であったことなどが紹介されました。

引き続き、鍛治潜水艦隊司令官をはじめ、夏の人事異動で着任された方々の着任の抱負などを頂きました。

松崎顧問の発声により杯を挙げ、指揮官等と会員が交流を深め会は大いに盛り上がりました。前会長の長崎顧問の中締めの乾杯をもって懇親会を終了しました。

（一瀬幹事　記）

２　潜水艦殉国者慰霊祭

10月20日（日）、東郷神社境内において、潜水艦殉国者慰霊祭が厳粛に執り行われ、横須賀水交会の潜水艦関係者も多数参列しました。

本慰霊祭は、先の大戦において戦死されたり、任務遂行中に殉職された潜水艦乗組員や技術者等潜水艦関係者の鎮魂を目的として、昭和33年から毎年10月20日に挙行されています。今年も、ご遺族や帝国海軍潜水艦乗りの皆様のほか、第2潜水隊群司令、潜水艦隊先任伍長を含め50余名の方々が参列されました。

当日は秋雨前線の影響で朝から冷たい雨が降り続くという生憎の天気ではありましたが、東郷神社の計らいで「海の宮」で慰霊祭が行われたため、ご高齢の方が多くなったご遺族や戦友の方々も雨に濡れることなく神事に参加されることができました。例年と違い静まりかえった境内で厳かに神事が執り行われる中、末貞臣元潜水艦隊司令官が「碑文」を読み上げられましたが、碑文に籠められた想いが参会者の心に染み渡っていくようでした。

慰霊祭終了後、参会者達は次回の集いを誓い合いながら境内をあとにされましたが、我が国の１００年を超える潜水艦の歴史を伝え、潜水艦乗りの心を繋ぐこの慰霊祭が末永く続いていくことを心から祈念します。

（永田幹事　記）

叙勲受章者

次の会員の方が叙勲を受けられました。

（敬称略）

春の叙勲

瑞宝中綬章　五味　睦佳
〃　古澤　忠彦
瑞宝小綬章　野末　博行
〃　藤井　明
瑞宝双光章　宮森　信次

秋の叙勲

瑞宝中綬章　山崎　眞
〃　三成　祐二
瑞宝小綬章　宮下　英久
〃　植松　秀昭
〃　坪谷　成壮
〃　高橋　昭光
瑞宝双光章　佐藤　晴紀

（本多事務局長　記）

訃報

昨年11月以降、次の会員が逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

（敬称略）

友森　武久(幹候13)　4月24日
阿部　洋継(幹候20)　8月1日

（本多事務局長　記）

新(編)入会員(3月～9月)

次の方々が横須賀水交会に新たに入会（編入）されました。

（敬称略）

後藤　佑光(横教66)　前島　廣利(横教189)　品川　隆(幹候30)　岡崎　正夫(有志)　伊藤　高一(予科練)　仁科　敏和(有志)　高瀬　宏司(有志)　長谷川　優也(有志)　都田　利夫(有志)　天野　高枝(有志)　横井　久美子(遺族)　藤田　毅(幹校31)　有村　邦明(幹候19)　槇原　伸一(幹候27)　田口　日出光(有志)　泉　三省(幹候29)　岩崎　啓一郎(有志)　丹生　誠(遺族)　横井　克裕(有志)　徳原　光洋(有志)　大津　雅紀(幹校30)　横山　恵一(有志)　勝目　純也(有志)　益子　光久(幹候31)　古内　慧(有志)　平野　広(横教204)　竹内　えり子(有志)　小野　智司(横練201)　杉田　秀夫(横鎮S17)　鈴木　恭平(有志)　青山　智雄(有志)　石川　宰敬(有志)　内山　寿(部内23)　加藤　昌彦(有志)　田中　博司(幹候21)　近藤　篤史(幹候51)　新谷　仁(幹校27)　櫻井　孝(有志)　牧村　建夫(有志)　峰　圭三(幹候32)　井上　香織(有志)　山口　透(幹候29)　矢野　一樹(幹候29)　荒井　眞一郎(事務官)　田島　正広　有志)　保智　康彦(有志)　大野　慎介(有志)　吉田　巌(幹候35)　小野　隆康(有志)　石井　剛(有志)

（高橋幹事　記）